
帰国渡日児童生徒つながる会

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

- ・名称「帰国渡日児童生徒つながる会」
- ・目的

現在、京都府の学校には、国際結婚の家庭に生まれた子どもや、在日外国人、帰国児童生徒などさまざまな形で「外国につながる児童生徒」たちが点在している。そのような生徒たちは、言葉や文化が違うということから、他の日本人の生徒たちとのコミュニケーションが上手いかず、クラスで孤立してしまうことも多いようである。そのような生徒たちが出会い活動することを通して、同じようなことに悩んでいる人がいるのだということを知り、そんな悩みを分かち合える友達を得ることができること、また、一人一人が持つ個性を尊重し、自分自身や自分のルーツに自信を持ち、彼ら自身がその国の言語や文化を大切にできるような場を提供することを目的として、2008年度よりe-projectを利用し活動を続けている。

つながる会の活動は主に一年を通して春と夏の2回、各数日間行っており、それに向けて週一回程度ミーティングを行っている。つながる会の活動をより多くの外国につながる子どもたちに知ってもらうため、活動日の1・2カ月前にはチラシと申し込み用紙を作成し、京都府内の中学校に郵送している。

参加者は去年までは、中国にルーツを持つ子どもたちが多かったが、今年はアメリカやフランス、フィリピンなど様々な国とつながりをもっている子どもたちも参加してくれた。参加者は長い間日本に住んでいる、あるいはは

生まれ育ったという子どもから、渡日して間もない子どもまで様々である。そのため日本語がそれほど得意でない子どももいるが、日本語も中国語も話せる子どもやつながる会の留学生スタッフが通訳をし、コミュニケーションをとりながら活動をしている。

2. 代表者および構成員

○代表者

日下部真依 国語領域専攻 2回生

○構成員

永安 聡子 国語領域専攻 4回生
 艸山小奈津 国語領域専攻 4回生
 森川みど梨 国語領域専攻 4回生
 安福 佳奈 国語領域専攻 4回生
 山本 舞 国語領域専攻 4回生
 南 侑樹 英語領域専攻 4回生
 趙 千慧 教育学専攻 3回生
 原田 裕 国語領域専攻 3回生
 口石 梨絵 国語領域専攻 2回生
 児玉 萌 国語領域専攻 2回生
 宮側由加里 国語領域専攻 2回生
 劉 飛亜 教育学専攻 2回生
 鄭 紫微 教育学専攻 3回生
 嵯峨根早紀 教育学専攻 1回生
 郭 煜 教育学専攻 1回生

3. 助言教員

浜田 麻里先生（国文学科）

第2章 内容や実施経過など

1. 夏の活動について

外国にルーツを持つ子どもたちを集めて活動を行うために、毎週一回集まって会議を開き、準備を進めていった。以下では、毎週のミーティング等の準備過程を実施経過、子どもたちを集めての実際の活動を活動内容として記す。

○実施経過

4月から、毎週木曜日の昼休みに集まり、

ミーティングを重ねて準備を進めた。
具体的な大きな動きと経過を下にまとめる。

4月	内容考案
5月	活動目標・内容・日程の決定
6月	チラシ作成・印刷・発送 第一回下見
7月	活動内容の変更・決定
8月	最終下見 直前ミーティング 事前活動 直前ミーティング 買い出し 野外活動 事後ミーティング

○活動内容

(1) 1日目・勉強会兼事前活動

子どもたちが初めて集まる日。18日のメインの活動に向けての顔合わせを兼ねた活動

日時：2011年8月12日（金）

場所：京都教育大学 スキル室

タイムスケジュール

10:00	京都教育大学 スキル室集合 アイスブレイキング
10:30	勉強
12:00	昼食
13:00	勉強
15:00	レクリエーション
16:00	18日の説明
16:30	解散

・勉強会について

中には、日本語理解が不十分な子もいるため、大学生が隣でサポートをする形で、夏休みの宿題や学習の復習、日本語の勉強などを行った。

・レクリエーション

メインの活動を迎える前に子どもたちが打

ち解け合うことを目的としている。

(2) 2日目 野外活動

子どもたちが友達の輪を広げられるような様々な企画をした。

日時：2011年8月18日（木）

場所：京都府立山城総合運動公園
（太陽が丘）

タイムスケジュール

9:30	JR 宇治駅集合
10:00	太陽が丘到着 アイスブレイキング
10:30	オリエンテーリング
12:00	昼食 特技披露
13:30	ラジオ体操
14:00	レクリエーション
15:15	まとめ
16:30	終了

・オリエンテーリング

太陽が丘の「冒険の森」を利用して、オリエンテーリングを行った。各ポイントに大学生を配置し、子どもたちが順に回ってくるという形で行った。各ポイントでは出されたお題を協力してクリアすれば次に進めるというルールであった。冒険の森は本当の山の中にコースがあったため、道の分岐点などにポイントを配置して迷うことの無いよう配慮したほか、各グループにスタッフを1名付け、何かあった時に対処できるようにした。もちろん、このスタッフは緊急時以外に何の手助けもしないようお願いした。



・特技披露

フィリピンルーツの子どもたちがダンスを、中国ルーツの子どもが中国武術を披露してくれた。

・ラジオ体操

中国のラジオ体操を、スタッフの中国人留学生に先生になってもらい、皆で行った。



・レクリエーション

子どもたちの交流をさらに深めるため、伝絵ゲームと氷鬼をした

・まとめ

オリエンテーリングの班員に色画用紙に、「ありがとうカード」を作成した。カードを作り、気持ちを伝えあうことで、子どもたち同士の交流をより深めることを目的として行った。



2. 冬の活動について

○実施経過

10月から、毎週木曜日の昼休みに集まり、

ミーティングを重ねて準備を進めた。

具体的な大きな動きと経過を下にまとめる。

- 10月 まなびの会 計画
内容・日程の決定
- 11月 チラシ作成・印刷・発送
- 12月 直前ミーティング
買い出し
まなびの会 実施
事後ミーティング

○活動内容（勉強会）

子どもたちの学習を支援することを目的とする

日時：12月27日（火）・28日（水）

場所：京都教育大学 A1 教室、A3 教室

タイムスケジュール

- 9：45 集合（JR 藤森駅／京阪墨染駅）
- 10：00 自己紹介
- 10：10 勉強
- 12：00 昼休み
- 13：00 勉強
- 14：50 自由時間
- 16：00 解散

・勉強会について。

学校と同じ、50分を1まとまりとして、その間集中して学習が出来るようにした。冬休みの宿題や日本語の勉強、普段の勉強でつまづいた所の復習を行った。今回は、受験前ということで、中学3年生の推薦入試を受ける子どもたちのために、作文の指導や面接の指導も行った。多くの当日スタッフに手伝って頂き、できるだけ生徒一人にスタッフが一人つけるような状況を作れるようにした。机ごとに教科を決め、勉強したい教科の所に子どもたちが移動するという形で行った。

・自由時間について

子どもたち同士が、自由に話しをしたり、遊んだり出来る時間を設けた。子どもたちが、このつながる会に、自分と同じようなルーツ

をもつ友達との出会いや交流を求めて来てくれているということを考えてのことである。今回は、外で遊びたい子用にボールを用意したり、中で遊びたい子用に中国の伝統的な飾り物を作るコーナーを用意したりした。



第3章 結果や成果など

1. 夏の活動について

(1) 1日目・勉強会兼事前活動

○参加人数 子ども 19人
 スタッフ 10人

○活動内容

・勉強会

それぞれのテーブルに生徒 2~4人・スタッフ 1~2人がつく形で勉強会をした。各々の学力には、大きな差がみられた。そのため、スタッフが1人の生徒にかかりきりになってしまい、分からない問題があっても見てもらえない生徒が数人いた。全体的に、みんな集中して自分の課題に取り組んでいた。中には集中力が切れてしまう生徒もいたが、注意されると勉強するなど、勉強会で学習することの目的意識はあるようであった。

参加者の中には、まだ日本に来て日が浅い生徒もおり、彼らは、日本語や歴史を中心に学習していた。学習するうえでやはり言葉の違いは大きな壁となると考えられる。今後も、学校で学習するためのサポートが必要となるのではないか。

・レクリエーション

男女間の隔たりが大きく、また、ルーツの国ごとに分かれてしまって、あまり打ち解けたようには見えなかった。ゲーム自体は楽しんでいる生徒が多かったが、参加したくないと言い張る生徒もいた。しかし、他の参加者がゲームをしている様子を外から眺めて、話しかけたりはしていた。この活動で、新しく友人を作れた子もいるようだった

(2) 2日目・野外活動

○参加人数 子ども 18人
 スタッフ 12人

○活動内容

・オリエンテーリング

班で協力して、各ポイントを回れたようだった。ポイントでのゲームを通して、新たな一面が見られた生徒もいたようで、集合場所に戻ってきたときにはかなり仲良くなっていた。数人で集まってカードゲームをしている生徒たちもいた。男女やルーツの国の隔たりも、ほとんどなくなっているように見えた。

・特技披露

フィリピンルーツの生徒たちがヒップホップダンスを、中国ルーツの生徒が中国武術を全員の前で披露した。始めて見るヒップホップダンスや中国武術に、生徒たちの間からも歓声があがった。それぞれの文化や個性のよさが少し感じられたようだった。

・ラジオ体操

中国のラジオ体操だったため、言葉が分からなくても楽しそうに体を動かしている参加者が何人かいた。中国ルーツ以外の参加者も、自分たちの知っているラジオ体操とは違う振り付けのラジオ体操に興味を示し、中国語の掛け声を真似しながら一緒に体操していた。

体を動かすのが苦手な生徒も、外から楽しそうにみんなの様子を眺めていた。

・レクリエーション

伝絵ゲームは、絵の得意不得意で、楽しめた生徒とそうでない生徒がいた。

その反面、氷鬼は全員が、楽しそうに参加していた。スタッフが鬼だったということもあり、生徒間で作戦を練っている様子も見られた。仲間が捕まったら助けようとして、それまで話していなかった参加者とも仲良くなれたようだった。



・まとめ

最初のオリエンテーリングの班内で、ありがたカードを渡し合うのが目的だったが、密に関わる時間が少なすぎたり、言葉の壁にあまり配慮できていなかったりして、うまくカードを渡し合えた班もあったようだが、時間がかかっている様子の班が多かった。ただ、カードの形などは、相手に合わせた色や形を選んだりして、各々が工夫していた。

2. 冬の活動（勉強会）について

○参加人数

子ども 1日目 18人 2日目 21人

スタッフ 両日 17人

○活動内容

・勉強会

今回新たに参加してくれた子どもも多く、各自が課題に集中して取り組み、冬休みの宿題を終わらせてしまった生徒もいたようだった。ただやはり、日本語をあまり話せない生徒は、そもそも問題文の意味が理解できない様子だった。学力はあっても日本語で書かれ

た問題文の意味を理解できないという問題を抱える生徒が多かった。各々の学力やどの程度日本語を習得しているのかを把握して、その生徒の日本語能力に応じて、説明の仕方を変えていく必要を感じた。

2日目は、1日目同様、自分の課題を熱心に進めている生徒も多かったが、中には1日目に宿題を終わらせてしまって、1時間目から集中力が切れている様子の生徒もいた。そのような生徒も教室の外で気分転換させるなどしたら、再び机に向かった。また、推薦入試対策として作文・面接のコーナーを設け、言葉の壁を少しでもなくせるよう、スタッフが助言した。やはり、漢字や語彙力という点で困難があり、言いたいことはたくさんあるが、上手く表せないというもどかしさを感じた。3時間目には、模擬面接も行った。研究生として大学に来ておられる現職の先生にお手伝いいただき、入室の仕方から退室の仕方まで、少人数で丁寧に指導してもらうことができた。生徒たちは、とても熱心に取り組んでいた。

また、百人一首を学習したいという生徒も複数おり、別室で百人一首大会も行った。ここで違う中学の生徒同士の交流ができ、生徒達は少し打ち解けた様子だった。

・自由時間

今回の勉強会は前回ほど生徒同士が交流できる機会は多くなかったのだが、最後の自由時間で、言葉の違いはほとんど気にせず仲良くしている様子だった。ここでは、多くの生徒がリピーター・初参加に関わらず、一緒に話したり遊んだりするようになっていた。また、普段あまり自分のルーツの言語を話さなかった生徒が、まだ日本語が話せない生徒に母語で話しかけ、コミュニケーションをとっている様子も見られた。

第4章 まとめや反省、今後の展望など

(1) まとめと反省

夏の活動では、オリエンテーリングをすることによって、つながる会の活動に参加している子ども同士でもあまり親しくないメンバーで活動し、お互いの良いところを見つけ合うことを目的としていた。グループ内で交流がうまくいったものと、うまくいかなかったものがあったが、言語支援が必要な子どもと、そうでない子どもをどのようにグループ分けするかが課題である。また、特技を披露してもらうに当たって、子どもたちが肯定的な態度で鑑賞し、自分の特技を披露しようとしてくれたことはよかったと思う。このようなことが日々の生活での自信につながっていかればよいと考える。プログラムの間の休憩時間では、ルーツを持つ国を超えて、子どもたちの交流の場ができていた。交友の輪を広げることで、今まで自分には見えなかった新しい視点を知ることができ、より成長することができるのではないかと考える。

冬の活動では、学習支援を行ったが、在日している期間や置かれている状況が違うので、児童生徒それぞれで日本語の習得段階が違い、それに伴って学習内容や支援の方法も違っていた。それらに適切に対応し、子どものニーズに応えられたかどうか、特に日本語での学習が難しい児童生徒にどのように対応するかが今後の課題である。また、構成員の専攻領域が偏っており、理数系の科目を学習したい児童に対応しきれなかった。今後、当日スタッフを含め、構成員をどのように増やしていくかも課題である。今回の活動は勉強に目的を絞ってはいしたが、よい良く児童生徒同士が関わりあう機会を作ることができたのではないだろうか。

初めて活動に参加する児童生徒を、以前から参加している児童生徒と関係を作るための働きかけについて、今後考えていきたい。

(2) 今後の展望

今後、学習支援を行うにあたっては、子ども一人ひとりのニーズに応えられるようにする必要がある。今年度は参加者の中に受験生もいるため、学習支援を今後も引き続き行っていきたい。また、それに関して、子どもたちの担任の先生にも協力してもらい、効果的な学習方法や、子どもたちを取り巻く学習環境などについて研究したい。

また、以前から続けて参加してくれている子どもだけでなく、京都市の全ての中学校に案内を送り、より多くの子どもたちに活動に参加してもらいたい。

加えて、以前から問題になっていたものではあるが、中学生にあった遊びの内容・説明について考えることで子どもたちが十分満足したうえで、活動に参加できると考えられる。

上記のようなことを視野に入れ、今までの活動の経験を生かして、今後も外国にルーツを持つ子どもたちをつなげていく活動を行いたい。

今後、フィリピンにルーツをもつ児童生徒を対象に、定期的に学習支援を行う予定もあるので、そのような機会の中で、現在の海外にルーツを持つ児童生徒を取り巻く環境について研究したい。子供たちから次回の活動の要望があることは、私たちの活動を必要としてくれているからだと考え、その要望に応えるため、活動内容を充実させていきたい。

